

フィラー「このー」「そのー」「あのー」 について：その由来、機能、相互関係

On Japanese Fillers: *konô*, *sonô*, *anô*,

小 出 慶 一*

キーワード：フィラー、指示詞、相互関係、文
法化、注釈機能

1. はじめに

1-1. 問題の所在

この稿はフィラーと呼ばれるもののうち「このー」「そのー」「あのー」について、用法を観察し、その機能を検討するものである。

この3つの中で比較的多く言及されているのは「あのー」であるが、これまで必ずしも十分な記述がなされているようには思われない（注1）。たとえば、定延・田窪（1995）は、フィラー（注2）は情報の心的な処理操作にかかわるものとした上で、「あのー」の基本的機能について、「話し手が言語編集という、聞き手の存在を予定する心的操作をおこなっている際に用いられる」（p.79）ものであり、「この心的操作は具体的には、名前の検索と、適切な表現の検討」（同）の二つを行うとしている。「聞き手の存在を予定するもの」という点は確かにその通りだと思われるが、しかし、次の例のような「あのー」を「言語編集」であるとするのは、記述として必ずしも十分ではないように思われる。

1 1: はい、こんにちはー。

2: こんにちはー。

→ 1: あのー、私は【人名】といいます。よろしくお願ひします。

2: あ、よろしくお願ひします。【人名】と申します。 [W A f]

それは、「聞き手の存在を予定する」ということが十分に捉えられていないからである。「あのー」が現れるのは、聞き手が存在する場合のみである。従って、「あのー」の考察のひとつのポイントは、聞き手をめぐってどのような機能を果たすかということになるだろう。この点について、西阪（1999:89）では、「あのー」が出現するのは、話し手と聞き手の間に何らかの未調整の事態が出現したとき、たとえば、新しい話題が提示され、それが受け手に価値があることかわからないというような場合であって、

2 その当該の相互行為状況において、特定のことがらを「受け手に合わせてデザイン」しながら適切に語っていくうえで困難があるとき、話し手は、その困難を解決するために、その発言を「あのー」（など）によって有標化してもよい

のだとする。この記述は、確かに、対話における「あのー」の機能の核心に触れていると思われる。しかし、次のような場合の「そのー」も一種の「受け手に合わせ」たデザインをしていると見ることもできるだろう。

3 1: あ（2: はい）そうですかー。あのー、失礼ですけどご主人様は、どのようなそのー、例えば、ある、典型的な一日ですと、（2: ええ）何時頃お宅をお出になって何時頃お帰りになられるんでしょう？ [I T f]

* こいで・けいいち

埼玉大学教養学部教授、日本語教育

「あの一」が引き受ける「困難なこと」とはどんなものなのか、「その一」とは何が異なるのか、なぜ「あの一」という語がそのような機能を引き受けるのかという問題は残るだろう。

この稿では、従来ほとんど触れられなかった「この一」「その一」の検討も含めて、この3つのフィラーの性質について検討する。その後、この3つのフィラーが、指示詞コソア類の特徴を保持していることを指摘し、フィラー化することによってどのような機能が獲得されたかについて検討する。これらの検討を行うことによって、「あの一」が、なぜ、この3つのフィラーの中でより意識的に捉えられることが多かったかについても明らかになると思われる。

1-2. 用語、表記、データ、用例の示し方について

なお、「この一」「その一」「あの一」のような語群をなと呼ぶかであるが、この稿では、暫定的に、日本語教育の分野で比較的多く使われている「フィラー」という用語を使うことにする。

また、表記の仕方であるが、「あの一」「あの一(う)」「あの一」などと表記され、一定してない。ここでは、指示詞の「あの一」という表記と区別するために、フィラーを「あの一」と長音記号をつけて示す。これは必ずしも、フィラーが長音を伴って発音されるということを示すものではない。あくまで、フィラーとしての語を示すためのものである。

次に、この稿での検討に使うデータは、主として「インタビュー形式による日本語会話データベース」(以下「日本語会話DB」と略す、<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>) によっている。各用例の最後に付された[Y I f]などは、「日本語会話DB」からのデータであることを示すとともに、「日本語会話DB」での各

インタビューの名称である。

また、用例の表記、表示法は、「日本語会話DB」に示されたままである。ただし、用例中の検討対象フィラーには下線を付け太字で示した。下線付き太字でないフィラーは検討対象ではない。また、固有名詞に関しては、ここでは【人名】などとした。また、用例中の話者「1」はインタビューする側、「2」はインタビューされる側である。なお、検討対象箇所をわかりやすくするために、「→」などを付したり、話者にA、Bなどの符号を付けた場合もある。「日本語会話DB」以外の用例には出典を示した。出典を示していないものは、作例である。

1-3. 考察の手順

以下、2～4節で「この一」「その一」「あの一」の順で個々に検討を加え、5節で3つのフィラーの性質についてまとめる。6節では、それらの検討をもとに、指示詞とフィラーの関係、フィラー化することで何を得たか、またフィラーの持つ対人的な機能について考察する。

2. 「この一」について

はじめに、「この一」について検討する。

まず、例を見てみよう。例4では、「この一」は「棒」という名詞の直前に現れている。が、特定の「棒」を指してはいない。発話時において、心的に思い浮かべられている内容について、「棒」という形式を与えることができるか検討中であるということをマークしているだけである。心の中にあるけれども形式的に定まらない内容を意識内で指し示し、そのことによって、その出現を予告することになる。それが「この一」の役割だと思われる。

4 2: はい。それ(1: うん) いろんな、あの一、いろんな方があの一の知恵を授けてくださいますね、あの一、うん、ポ

ンのこの、棒ですか？あれのう、裏にかっく、置くようにすると、鳥は狙わないとかって教えてくださいましたので、今のところそ、そういう風にしてありますが（１：あ、そうですか）、はい。 [MF f]

例４は、いわば一つの語に対応するサイズのものだったが、「この一」の関わる内容は、例５－７のように、より大きいものにもなる。

例５では、「この一」の指し示す内容がどのようなものか推測はできる。しかし、その表現形式は確定されないままに発話が展開されている。

- ５ １：今、金融界は、日本は色々大変、
（２：そうですね）ん、なんですが、
（２：ええ）ば、留学、なさって間一
（２：ええ）にも、（２：はい）色々あったんですが、（２：ええ、聞きました）
ねえ、（２：ええ）あの一、この、今の金融界の色々な問題、（２：ええ）バブル以後の、（２：ええ）どういう風に考えてらっしゃいますか [。] あ、いわゆる住専の問題とか、（２：ええ、ええ）うん。 [TN f]

話し手は、「この一」によって発話時現在に心にある内容を指しつつ、聞き手の反応（この例で言えば、「ええ」などの相槌がそれにあたる）を見ながら話しているわけであり、どう伝えるのがよいのか、その方法を探りながら、発話を形成していくという、相互交渉的会話形成のための手続きと見ることもできるだろう。

次の例も、一種、方略的に「この一」が使われている例である。

- ６ ２：（前略）それで、あの一そのジャルキャップに、応募しまして、そのジャルキャップっていうのあの一、なんていうんですかね、この、アメリカに行つて、ボランティアとして、日本語一、

を、教えたりとか、（１：ふーん）まあ日本の文化を紹介するっていう、まあ一年間のプログラムなんですけれど、
（１：はい）まあともかくちょっとアメリカに、あの一昔から留学、っていうかあの一、留学したかったので、えっとそれに参加しまして、（以下略）

[T S m]

例６の「この一」は、「ジャルキャップ」という多面的な内容を含んだものを説明しようとする際に、「この一」以下の内容が暫定的なものであり、必要十分なものではない可能性を示している。「アメリカに行つて、ボランティアとして、日本語を教えたり、日本の文化を紹介するっていう、一年間のプログラム」という部分を指しているように見えるが、これは「ジャルキャップ」を表現する十全なものではないという認識によるものとも言えよう。例６の「この一」は、「言い換えれば」「なんと言ったらいいでしょうか」などのパラフレーズができそうであるが、それは「この一」が表現形式の確定していないことを示すものだからである。この例でも、「この一」が、その場で、聞き手との相互的なやりとりの中から、表現が形成されていく局面にあることを示すものであることがわかる。

次の例７は、「この一」のマークする内容が、２つのターンにまたがる例である。

- ７ １ A：あーそうですか、なるほどね。ふーん、スポーツなんか興味ないですか？
２ B：えーと、高校の時にあのバレーボール、（１：あバレーボール）やってみました。
→ １ C：ああ。日本の男子バレーなんかどうですか？このもうオリンピックが始まるんだけど。
２ D：そうですね。（１：うーん）最近、

男子の方はあまり、ぱっとした（１：しませんが）動きはないんですけど、（１：うん）ま女子の方は、まあ少し、（１：うん、うん）希望があると思いますけれども。

→ 1 E：前ね、（２：はい）わたくしが若かった頃は、（２：ええ）あの日本のバレエってというのは（２：ええ）特に女子はとても強かった。（２：そうだったらしいですね）で、それが、どうして、最近は、あれなんでしょう、衰退してるんですか？／特に男子ひどいと思いますけど。（２：そうですね）ええ。その、理由ってどういうところにあると思います？

[N F m]

この例の「この一」がマークする内容は、相手の発話をはさんで、1 Eにまで及ぶと思われる。しかし、ここでも、「この一」は、表現の形式は固まってはいるがひとかたまりの表現内容がある、ということマークしている。

以上の検討から、対話における「この一」の機能について次のように言うことができよう。

8 発話時に心的に思い浮かべられている内容があるが、その表現形式が確定しておらず、実時間的に形成されつつあるものであることを示す。これは同時に、聞き手には表現形式が模索中であるというマークにもなる。

3. 「その一」について

次に「その一」について検討する。例を見てみよう。

9 2：音楽はあの一、場所と時間の、（１：ええ、ええ）都合もありまして、あのシンセイサイザーに全部うちこみまして、（１：あ、うちこんで）それで、

（１：ああ、なるほどね）プレイするだけで、やってみました。

→ 1：ああ、ああ、じゃそれに合わせて歌う、（２：はい）ってということですか？
そうですかー。うん。その、シンセイサイザーなんかに入れるのは、なさるの、やっぱり？ [N F m]

例9は、「その一」がまだ指示詞としての性質を残していて、「シンセイサイザーなんかに入れるの」という部分、つまり、先行する聞き手の発話内容を指しているとも見ることできる。しかし、「その」のあとにポーズがあり、聞き手の先行発話を意識しつつ、また、それに関連した内容を話そうということのマークであるとも見ることができよう。つまり、指示詞としての性質が希薄になっており、先行発話内の特定の要素を指すという“強い指示”から、発話内容に関連した事象を指示するという“弱い指示”への変容を示す用法、境界的用法であるとも見ることができよう。

このような変容がさらに進むと、特定の先行発話もなく、特定の要素とのつながりもない用法になる。それが、次の例10、11である。

10（例3再掲）

1：あ（２：はい）そうですかー。あの一、失礼ですけどご主人様は、どのようなその、例えば、ある、典型的な一日ですと、（２：ええ）何時頃お宅をお出になつて何時頃お帰りになれるんでしょう？ [I T f]

11 1：じゃ、あの一、結婚なさるまでは（２：ええ）お勤めなさいましたか。
2：え、子どもが生まれるまで、5年前まで（１：ええ）ええ（１：そーでいらっしゃるしかったですか）ちょっと勤めておりまして、ええ。

→ 1：その、女性、ま、今女子大生の就

職難で言われてますけども（２：ええ）
その女性でお仕事を持っていっちゃ
って（２：ええ）その家庭、その特に
その子育て（２：ええ）の両立という
ような事は、やはり大変だと思われま
すか。 [K J f]

例10、11の「その一」は、後続内容が聞き手
の領域に関する事柄であることを予告するだけ
である。例10は相手の配偶者の生活時間につい
ての質問、例11は相手の見解を問う質問である。

「その一」には、このように、後続内容が聞き
手領域とかかわりを持つことを示す用法とは別
にもう一つの用法がある。それは、例12～14の
ように、後続内容が話し手、聞き手双方と関係
のない領域のものであることを示す用法である。

例12は、最近の犯罪増加の背景は何かという
質問への答えである。

12 ２：うーん。そうですねーあの一／んー
／一つにはとてもあの一／自分のホホ
あの一身近なことばかり一の発想で申
し訳ないんですけども。やはりその一
子供が一自由、自由奔放ある意味では
いいことですけれどもある意味では節
制がなくて、そういう行き着いた所に
あるのかな、って（１：うーん）いう
気が（１：うんうんうんうんうん）し
ますけれども。ですから。 [M T f]

この発話では、自分の立場からの内容と、自
分のではない内容とが色分けされている。「あ
の一」が「自分の身近なこと」であるのに対し
て、「その一」は「子供は自由奔放（であるべ
き）だ」という他者の意見が、批判されるべき
考え方として提示されている。

次の例13は、自分の将来の計画（希望）を述
べるものである。

13 ２：ええ、と、／ええー日本語教師とい
うことで、（１：うん）今あの一、勉強

していくつもりなんです、（１：う
ん）そのなる前に、とりあえず、とり
あえずじゃないですねあの、（１：う
ん）色々な経験を積んで、いきたいと
思ってるんですね。（１：はいはい）で、
その中で、今、今まだ２年生で、（１：
うん）その一、はっきりとこしたこれ
が一、したいというのはないんですが、
（１：うん、うん）もしその、過程の
中で、（１：うん）これがしたいとい
うのが見つければ、その一般企業に就職
する（１：うん）というのも、（１：可
能性）ええ、あります。 [N F m]

ここでの「その一」は、将来についての仮定
的な話の中で現れている。将来のことは概念的
にしか捉えることができない。「その一」は、話
される内容が概念的なものであることをマーク
していることになる。

例14は、日本ではなぜサッカーの一流選手が
育たないのかという質問への答えである。

14 ２：うーん。やっぱりその、サッカーが、
ち、サッカーが一番人気があって、
（１：うん。）そしてサッカーを中心に
（１：うん。）あの一、スポーツの世界
が、サッカー中心に出来上がっている
所だと、（１：うん。うん）運動神経が
いい人はみんなサッカーに（１：サッ
カーに。）集まるわけですよ。

[K N m]

ここで述べられていることは、話し手自身の
考えと言うより、“一般的な見方”である。“一
般的な見方”というものは、つまり、話し手が
距離をおいているものでもある。

例12～14の「その一」は、話し手・聞き手の
いずれともかかわりのない領域内容の出現を
マークするものであった。

例 9～11と例12～14の違いは、このように聞

き手領域へのかかわりという点である。前者は、聞き手領域に直接的に触れているが、後者は相手領域とは関係がない。しかし、大事な点は、話し手から見れば、いずれの場合も自己領域ではないということである。あるいは、話し手がその内容に関して、独占的に自己のものとして述べるできないもの、および、述べようとしえないものである。(注3)

ここまでの検討をまとめると、「その一」の機能は次のように記述できよう。

- 15 後続する発話内容が、話し手にとって非関与的(話し手に関わりがない、あるいは、聞き手・話し手双方に関わりのない)領域のものであること、あるいは、話し手が独占的に関与するものとは主張できない、しないものであることを示す。

4. 「あの」について

次に「あの一」について検討する。「あの一」に関して、3つのフィラーの中でも特徴的な用法は、発話冒頭に現れる場合であると思われる。そこで、まずこの発話冒頭の「あの一」について検討し、次にそれ以外の、発話の中に現れる「あの一」について検討する。

4-1. 発話冒頭の「あの一」

発話の冒頭の「あの一」は、「この一」「その一」にはない、「あの一」独特のものである。

談話の冒頭部では、すぐに主要部に入る場合もある(たとえば、人に危険を知らせるような場合)が、主要部に入るまでにいくつかの段階を経ることが必要な場合もある(たとえば、ひとに頼みごとをするような場合)。「あの一」は、このような、段階が移行するところに現れる。

16 (例1再掲)

- 1 : はい、こんにちは。
2 : こんにちは。
→ 1 : あの、私は【人名】といいます。よ

ろしくお願いします。

- 2 : あ、よろしくお願いします。【人名】と申します。 [WA f]

- 17 1 : あ、どうぞ宜しくお願い致します。

2 : 宜しくお願い致します。

- 1 : はい。あの、今日はわざわざ、あの、お越し頂きまして本当にありがとうございます。

2 : とんでもございません。

- 1 : はい。あの、外は、大変、雨が、(2 : ええ) 強かったと思うんですけども。

2 : なにか、今日は久しぶりに、土砂降りの雨で、(以下略) [TN f]

例16では挨拶が終わって名乗りに移るところに、例17では挨拶が終わって礼を述べるところ、および、それに続く天候話題へ移るところに、「あの一」が現れる。いずれも、談話の段階が移行するところであり、隣接ペアの第1発話ばかりである。第2発話には出現しない。これは、「あの一」の、談話ステップの移行をマークするという性質によるものであると思われる。

次の例18、19は、冒頭部以外における展開を「あの一」がマークしている例である。例18では、「はいわかりました」という話題の終結宣言の後に現れて、新話題への移行をマークする。例19では、同一話題の中でではあるが、質問の前に現れて新たな方向へ移行するポイントをマークしている。

- 18 1 : なるほどね。

2 : ええ。

1 : はい、わかりました。あの、じゃあちょっとあの話を変えてね、日本一の場合ですけども、あの一ここの大学にも、留学生けっこういますけれども、比較的黒人少ないですね。 [WA f]

- 19 1 : あーそうですか。ええっとそうしますともう専攻は決まっています。

2 : ええ。

1 : 何ですか？

2 : アメリカ研究を、希望してるんです

けれども。

→ 1 : あー、あのーアメリカ研究っていうのは学際的な(2 : ええ)あれですか？

(2 : はい) あの、研究プロジェクトですか？

2 : ええ。 [WA f]

さらに、「日本語会話DB」には見られなかったが、次のように、コミュニケーションそのものの開始に関わる用法がある。

20(店に入ったが無人であるときの呼びかけ)

{*このー/*そのー/あのー、すみません。

21(ハンカチを落としたのに気付かず歩いていこうとしているヒトを呼び止める)

{*このー/*そのー/あのー、もしもし、ハンカチ、落としましたよ。

このような呼びかけ、呼び止めがコミュニケーション回路の開始にかかわるとするのは、21のように、これらの発話を行っても、コミュニケーション回路は、開かれずに終わることもあるからである。

22 A : あのー、すみません。

B : あ、今手が離せないの、あとにしてください。

A : はい。

このような場合は、ここでコミュニケーション回路は閉じられることになる。「あのー」は、まったく回路の存在していない段階から、開始への打診をマークするわけである。

ところで、以上のように「あのー」が新たな談話局面への移行をマークするものであるとするならば、そのためには、次の2つの機能を果たす必要がある。

23 α . それまでの談話の流れの処理

β . 新たな談話の局面、方向の提示

これに対応する形で、「あのー」が行っていることを示せば次のようになる。

23' α . それまでの談話の流れをとりあえず中断する

β . 話し手が自分の発想から発話を展開することの前触れをする

「このー」には、23 α 、 β に対応するような機能はない。また、「そのー」には、23 α のような先行談話に対する操作性がない。そのため、例20、21では使えないのである。「そのー」が持っているのは、23 β に関わる機能のみである。

「あのー」のように、それまでの談話の流れを断ち切って、新たな方向を示すというような操作性は持っていない。「そのー」が、新しい方向への移行性を持たないのは、それ以前の文脈への参照性を持つからである。逆に、「あのー」には、そのような参照性がない。そのため、「あのー」のには始発性(移行性)が付与されることになり、ターンの獲得のための手続ともなったわけである(注4)。

このような始発性(移行性)を持った「あのー」は、談話の局面移行手続きの際に規則的に現れることが多く、フィラーの中では意識化されやすいものであり、小説などの会話中に記述される例が見られる。明治期のものはもちろん、江戸期まで遡ることができる。

24a. 為永春水(1832)『春色梅児誉美』

丹「これさ、マア泣なさんなヨ。サアサア、かほをふきなと抱よせれば、嬉イ、しそふにより添ひ

長「お兄さんエ

丹「エ△

長「あのネ、あのウ、どふぞ早く斯して居て、何かの用をしてあげたり、夜も淋しくないやうにしてお咄しをい

たすやうにして

丹「それからどふするのだへ (注5)

b. 尾崎紅葉 (1897)『金色夜叉』

「いえ、かうしてをると、今に直に癒ります。憚ですがお冷を一つ下さいましな」

静緒は驀地に行かんとす。

「あの、貴方、誰にも有仰らずにね、心配することは無いのですから、本当に有仰らずに、唯私が嗽をと言つて、持つて来て下さいましよ」(注6)

また、日本語教育の分野でも、「あの一」だけは意識的に取り上げられ、教科書にも登場する。上の小説類と同様、「あの一」は別格の扱いになっている。ただし、会話に導入されるのは遅めである。次の例は、広く使われている『しんにほんごのきそⅠ』(海外技術者研修協会、1990)であるが、10課になって初めて出てくる。

25. 「道を聞く」

ラオ：あのう、近くに郵便局がありますか。

木村：ええ、ありますよ。駅の前です。(注7)

4-2. 冒頭位置以外(およびその性質に準じる)位置に現れる「あの一」

さて、次は、発話の中に現れる「あの一」の用法である。同一の発話の中に複数回現れる場合のあることからわかるように、これは談話局面の移行というような、談話構造に関わるものではない。

談話形成にかかわる「あの一」とかかわらない「あの一」と、この2つの「あの一」はどのような関係のものか、この点も含めて、発話中に現れる「あの一」を検討する。

例26では、「あの一」は不規則に出現しているように見えるが、よく見るとある種の傾向を読み取ることができる。それは、「あの一」が出現する箇所(注)の性質である。

26を見ると、冒頭から5回現れるが、聞き手

である「1」のあいづち「ええ、ええ、ええ、」(スクリプト波線部)の後にはまったくない。

「あの一」が現れている箇所は、話者「2」が、自分の研究対象である「マヤ・アンジェロ」の基本情報を提供しているところに対応する。聞き手とのギャップを想定し、聞き手の反応を見ながら、説明をしているところである。

26 1：(研究について) どういうふうに、あの、考えてらっしゃるんですか？それ。

→ 2：あの一、あの、黒人一の一、黒人女性一の一、あの、詩人で、マヤ・アンジェロさんっていう方、あの、クリントンの、あの、大統領の就任式で詩を読んだ方なんですけれども(1：ええ、ええ、ええ)彼女にとっても興味を持っていて、今一彼女の本に出会って一すごく一まあ、彼女についてやっていきたいなあっていうふうにすごく思っている(1：ええ)で、まあ、いろいろな角度から、アプローチして、まあ、もちろん文学作品、を一見たりとか彼女の書く、まあ文学作品を見たりだとか、あるいは、歴史的な背景だとか一、そういう文化的なものとか、いろんな角度からアプローチしたいと思ったので、学際的な、あ、研究をしたいと思

[WA f]

「あの一」は、聞き手の様子を見ながら談話を調整するとき現れていると見ることができよう。

「あの一」は、聞き手との相互作用的な談話形成のための手段とも言える。もちろん「言語編集という心的操作」のために使われることもあるだろうが、それだけでは、「あの一」の役割を十分に捉えたとは言えないのである。

もう一つ例を挙げる。26のような説明でなく、アルバイトの交通費をめぐる交渉するというロールプレイの会話である。話者「2」が交渉

者である。

27 1 A : (略) あとは、あの一まあ500円つ
ていうことでお願い、します。

2 B : あっ、はい。

1 C : はい。

→ 2 D : それであの一私あの一、ここの一あの一レストランまで一、少し一遠
い一ところに住んでまして一。

1 E : あ、そうですか。

→ 2 F : ええ。あの一通勤手当てがなしつ
ていうことなんですけれども一(1 :
はい) 全額とは、あの一申し、もう、
あの一、全額とはいわないんですけれ
ども、少し、あの一支給していただ
くと一(1 : あっ) 助かるんですけ
れども。

1 G : あっ、そうですか。ええっと実費
でどのぐらいかかりますか？

→ 2 H : ええと一、実費、往復一ですと700
円ぐらいかかる。

1 I : あーそうですかー。そうですか、
じゃあ、そうですね、(略)

(WA f)

交渉ごとをうまく進めるには、相手を説得す
るための手続きがだいじである。話者「2」は、
要求を提示するまでに、要求の理由、譲歩案を
提示し、要求の受け入れられやすい環境を作ろ
うとしている。

2 Dの最初の「あの一」は、それまでの話を
終わらせ、交渉へ切り替えるためのものである。
その後、「あの一」が6回ほど出現する。そして、
話者「1」の「わかった」という表明が1 Gで
行われた後、2 Hでは「あの一」がなくなっ
ている。

この例でも、「あの一」は、話し手内部の心的
な操作というよりは、対人的な調整である面が
強い。「あの一」が現れるのは、西坂 (1999) が

言うように(2の引用参照)、自分の発話内容が
問題なく相手に受け入れられるとは想定しにく
い、調整や様子見の必要なところだからであろ
う。

そのような相互作用的な機能が必要となるの
は、この(例26, 27) 場合、「あの一」が、話し
手自身の発想、領域、都合を基盤とした発話を
行うことをマークするものだからである。

これは、「その一」の非自己関与性と大きく異
なる点である。このことは、会話の中の「あ
の一」「その一」の使い分けにはっきり現れてい
る。

28 1 : 予備校というのは(2 : はあ) いか
がでしょうか、その(2 : んー) 予備
校の位置といいますかね、その、(2 :
位置付けですか) ええ、位置付け、教
育制度の中の。

2 : ええ、いろいろな問題あると思いま
すけど、学びたいって子に教える意味
では、あの一、やりがいはあるなと、い
うふうに思います。 [K J f]

29 1 : ああーなるほどね。(2 : はい) はい。
あの一、わたくしどもが、わたく
しもだい、外国人と接する、ような、
ことが、機会が多いんですけれども、
なかなかあの一、／アパートを探したり
するって大変だっていうふうに、きき
ますけども、(2 : そうーなんです) な
んかその、そのへん一のことは、ご存
じですか。 [F H f]

例28の「その一」は、相手領域の事柄(仕事
についての話者「2」の考え)に触れる場合に
現れ、その答えとして自分の考えを述べる話者
「2」の発話では、「あの一」が出現している。
例29は、一人の話者の発話に「その一」「あの一」
が使い分けられている例であるが、自分の経験
を述べるときは「あの一」、相手から情報を得よ

うとする事柄については「その一」が使われている。

4-3. 2つの「あの一」の関係

ここでは、4-1 で述べた談話局面展開に関わる「あの一」と、4-2 の対人調整的な「あの一」はどのような関係にあるか考える。記述を簡単にするために、前者を「あの一A」、後者を「あの一B」とする。

前に、23´ で、「あの一」は、次の2つの機能を持つとした。

α. それまでの談話の流れをとりあえず中断する

β. 話し手が自分の発想から発話を展開することの前触れをする

とりあえずこのような区分はできるのであるが、「あの一A」「あの一B」は、この2つの要素のどちらが前面に出て機能するかという違いと見ることもできよう。どちらも幾分かは、この2つの要素を持っているからである。26(「あの一A」に属する例)でも、「あの一」の後で、話題を変えたり、打ち切ったりすることが可能だからである。が、いずれにしても、「あの一」AとBに共通するのは、23´ βに関わる機能である。「あの一」の機能のすべてはここにあるとしていいだろう。

以上をふまえて「あの一」の機能をまとめると、次のようになる。

30. 話し手が自分の発想から発話を展開することの前触れをする。これは、それまでの談話の流れに関わりなく持ち出されることもあるので、場合によっては、それまでの談話の流れを中断することもある。

5. 3つのフィラーの基本的な性質—ここまでのまとめをかねて—

5-1. 3つのフィラーの基本的な性質

ここまで3つのフィラーについて述べたことを再掲すると、次のようになる。

- 31 この一：発話時に、ある表現内容が心的に思い浮かべられているが、その内容を表す形式が確定していないとき、その内容を指す。(8の再掲)

その一：後続する発話内容が、話し手にとって非関与的（話し手に関わりがない、あるいは、聞き手・話し手双方に関わりのない）領域のものであること、あるいは、話し手の独占的な関与を主張のできないものであることを示す。(15の再掲)

あの一：話し手が自分の発想から発話を展開することの前触れをする。これは、それまでの談話の流れに関わりなく持ち出されることもあるので、場合によっては、それまでの談話の流れを中断することもある。(30の再掲)

5-2. 3つのフィラーの談話の中での機能と相互関係

このような性質を基盤として、3つのフィラーがそれぞれ談話の中でどのようなレベルでの機能を果たすかを整理すると次のようになる。

- 32 この一：ひとまとまりの内容の開始部の表示

その一：談話参加者と談話内容の領域との関係表示

あの一：コミュニケーションの開始、談話ステップの移行、談話形成に

関する対人的調整

この関係を図式化すると次のようになる。簡略化のために、「この一」を【コ】などと表す。

33 (フィラーの相互関係)

〔対立軸 1〕：【コ】－【ア】

|

〔対立軸 2〕：【ソ】－【ア】

対立軸 1 は、談話の形式面に関するマークとして機能するもの、対立軸 2 は、談話の参加者と談話内容領域との関係に関するマークとして機能するものである。

この図が意味するところは、3つのフィラーが2つの対立軸をめぐって交錯しているということである。アは、この2つの対立の双方にかかわっている。

「その一」「あの一」は対人的な場面以外で現れることはない（「この一」は一人話に現れないとは言いきれないが）。それは、ここに示したように、「その一」「あの一」が、対立軸 2（参加者と談話内容の関係について注釈）に関わるものだからである。また、「あの一」がより多くの局面で現れるのは、「あの一」が幅広い機能を持ち、2つの軸に関わるからである。

6. 考察 一指示詞との関係を中心に

以上の検討をもとに、指示詞とフィラー「この一」「その一」「あの一」との関係を軸にフィラーの機能を考える。なお、煩雑さを避けるために、臨時的に以下、この3つのフィラーをまとめて『フィラー』と呼ぶことにしたい。

6-1. 『フィラー』と指示詞の関係

『フィラー』と指示詞との関係を見てみよう。

指示詞の現場指示用法では、他者が存在しない場合は、現場にあるものはコアの対立で捉えられる。コアの区分は、話し手の操作が可能か否かによる。他者が存在する場合は、そこ

に聞き手領域および中間領域という聞き手とも話し手とも関係付けられない領域が出現する（金水・田窪1992など）。したがって、現場指示における指示詞コ・ソ・アの相互関係は、

34 (現場指示用法での指示詞の相互関係)

【 【コ・ア】：ソ 】

と見ることができる。

一方、文脈指示においても、2つの軸による対立が見出される。が、ソーアが現場指示とは異なる関係に立っており、指示対象の探索領域に関して、話し手の間接的概念的な知識領域か、直接的経験的な知識領域かという対立を見せている（黒田1979；金水・田窪1992）。それに対して、コは知識領域とは関わらない。従って、図式的に捉えるならば、次のようになる。

35 (文脈指示用法での指示詞の相互関係)

【 コ：【ア：ソ】 】

「フィラー」に関しては、33に関係図式を示したが、34、35と同じような書き方にすれば、次のように書ける。

33' 【コ：ア】：【ア：ソ】

この図式は、【コ：ア】という対立と、【ア：ソ】という2つの対立があることを示す。現場指示と文脈指示のアを軸とした対立を取り込んだ形になっている。ここに、フィラーの2面的な機能の源を見ることができよう。

6-2. 『フィラー』は指示詞から何を受け継ぎ何を変えたか

では、『フィラー』は指示詞から何を受け継ぎ、何を新たに獲得したか、改めて考えてみよう。

指示詞と『フィラー』を比較してみると、双方に共通して認められる特徴は、聞き手に対して、視線（あるいは注意）を向ける方向を示す（Levinson1984）という点である。

指示詞の場合、現場指示であれば、その場にある対象を示し、聞き手がそちらへ注意を向け

ることを促す。文脈指示であれば、注意を向けるべき文脈・知識領域を示す。しかし、『フィラー』は、この視線を向ける方向という点で指示詞と決定的に異なる性格を持つ。それは、指示詞が前方照応を行いうるのに対し、『フィラー』はこれから現れるものへの注意を求めるという点である。これは同時に、注意対象が、指示詞とは異質のものになったということである。指示詞が、命題形成要素を指すものであったのに対し、『フィラー』は、自らの発話行為への注釈、さらには、発話行為そのものとなっているからである。自らの発話行為への注釈とは、33に述べたように、後続内容がどのような性質のものであるかについて、話し手自身がどのようなものと見ているかを述べることである。

『フィラー』は、フィラー化することによって、後続部分に対する注釈へと性質を変化させ、いわば、モダリティ表現化したわけである。

6-3. 『フィラー』の対人的機能

フィラー化によって獲得されたもう一つのこととは、内容について聞き手の様子を見ながら形成していくという、対人的な配慮表現となることである。

それは、上に述べた注釈性の獲得と裏腹の関係にある。われわれが何らかの行為を行う場合、社会的ルールに抵触するおそれのあることがある。このような場合、それによるトラブルを回避するためには、その行為そのものを回避する、あるいは別の方法で目的を果たすなど、いくつかの方法があるが、もう一つは、ルール抵触の可能性のあることを事前に断ることである。これは、「夜分すみません」「こんなことを言っはなんです」などの注釈表現にも実現されている機能である。『フィラー』も、後続内容が参加者とどのような関係にあるかを表示することによって同様の機能を果たしていることになる。

「夜分遅く恐れ入りますが、」が独り言で出現しないのと同じ理由である。

このような性格は、「この一」→「その一」→「あの一」の順で顕著になる。「あの一」がより顕著な配慮性を持つのは、先述したように、「あの一」がそれまでの談話の流れを私的な観点から操作しようとする前触れだからであり、談話の形式面、実質内容面双方に関わるからである。

7. おわりに

この稿では、フィラー「この一」「その一」「あの一」の機能がどのようなものか、それらの機能は何に由来するものかを中心に検討してきたが、これらのフィラーが、指示詞の性質を残しながら、モーダルなものの表現へと変化した姿を垣間見ることはできたのではないだろうか。今後ここでの検討はさらに検証される必要があるのはもちろんだが、その一つの方法として、他言語での指示語のフィラー化の有無を調べることは有効であろうし、興味あることである。特に韓国語、トルコ語などのように指示が3系列に区分されている言語の場合は、日本語の検討のために欠かせないものだろうと思われる（金水・岡崎・曹，2002）。今後の課題としたい。

【注】

- 1：同様の指摘は森山・張（2002）にもある
- 2：定延・田窪（1995）の用語で言えば「談話管理標識」
- 3：「その一」をこのように非関与性予告と見る見方は、Nagura（1997）が「この一」を後続情報に対するinvolvementを表し、「その一」がdetachmentを表すとした見方と近いものである。ただし、「あの一」をもっとも中立的、無標としている点については以下に述べるように見解を異にする。
- 4：「あの一」がこのような、既存文脈を断ち切る性格を持つことは、別の見方をすれば、聞き手との文

脈あるいは知識の共有を前提としていないと言うことでもある。その点は、「あの一」と同じく呼びかけとしても、注意要求（本多2005など参照）としても使われる「ほら」と比較するとわかりやすい。「ほら」の用法は次のようなものである。

- 1 a. ほら、見てよ。
- b. ほら、これ、昨日言ってた本。
- c. ほら、だから言ったじゃない。
- d. ほら、おいしいでしょ。
- e. ほら、あの人、なんて言っただけ、あの人。

これらの例で「ほら」が要求していることは、次の2つである。

- ①話し手と聞き手が現にいる場所にある同じ対象へ注意を向けること
- ②話し手が、聞き手とに共有していると想定する記憶へ注意を向けること

「ほら」は、「あの一」と異なり、注意を向ける先が共有されているという前提が必要である。「ほら」の注意要求は、自分だけが持っている情報に注意を向けさせようとするものではない。もし自分だけの情報へ注意を向けさせようとするならば、次の2 a のように「あの一」が使われるだろう。

2 a. { あの一／＊ほら }、これ、いくらですか。

b. { ？あの一／ ほら }、これ、君のほしがつてた本。

「あの一」類には、共有という前提はなく、共有されていないものへの注意要求というものの「あの一」の特徴ということになると思われる。

5：『日本古典文学大系64』岩波書店、1962：117、『春色梅児誉美』後編巻之五第十駒

6：『明治文学全集18尾崎紅葉集』中編（四）の二、筑摩書房、1965：179。

7：なお、「その一」「この一」は、『春色梅児誉美』にはまったく現れない。尾崎紅葉(1897)『金色夜叉』についても、次の用例が1例見られたのみである。

・彼は始めて心安う座を取れば、恐る惶る狭山は先づその姿を偷見て、「何からお話し申して宜いやら……」「いや、その、何ですな、貴下方は添ふに添れんから死ぬと有仰る——！ 何為添れんのですか」（後編第5章）

これは本文の例25に挙げた日本語教科書も同様である。

【参考文献】

金水敏・田窪行則（1992）『指示詞』ひつじ書房

金水敏・岡崎友子・曹美庚（2002）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究——日本語・韓国語・トルコ語」

（『シリーズ言語科学4 対照言語学』、東京大学出版会

黒田成幸（1979）「(コ)・ソ・アについて」『日本語と英語と』くろしお出版

定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの一）」『言語研究』108：74-93

田窪行則（1992）「談話管理の標識について」『文化言語学—その提言と建設』三省堂

田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』257-279、くろしお出版

西原仰（1999）「会話分析の練習 相互行為の資源としての言いよどみ」（好井裕明・山田富次秋・西坂仰（1999）『会話分析への招待』世界思想社）

本多啓（2005）『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象—』東京大学出版会

森山卓郎・張敬茹（2002）「動作発動の感動詞『さあ』『それ』をめぐって—日中対照的観点も含めて—」『日本語文法』2-2：128-143

レヴィンソン、S.C. 著、安井稔・奥田夏子訳（1990）『英語の語用論』研究者出版（原著：Levinson, S. C.（1983）“Pragmatics”，Cambridge, Universitu Press.）

Nagura, T. (1997) “Hesitations (discourse markers) in Japanese.” 『世界の日本語教育』7:201-218